



シビルサポートネットワークニュース

NPO法人シビルサポートネットワーク

2015 年 10 月 31 日

2015 年秋季号

0 本号の内容

□ 秋に語る
・災害は忘れたこ
ろにやってくる

□ 事業報告
・「共創プラットフ
ォーム事業化研究
会」フェーズ I 報
告

・「自治体インフラ
メンテ事業化研究
会」報告

□ 活動報告
・番外 CSN サロン

・第 20 回 CSN サ
ロン

・サロン 20 回の歩
みをふり返って

□ トピックス
・CNCP が行った
アンケート結果

・シニア・アドバ
イザーの呼称変更
のお知らせとお願い

・辻田論文、中大130
年記念コンテスト入賞

□ CSN のうごき

□ 秋に語る □

災害は忘れたころにやってくる

鬼怒川の決壊に思う

副代表理事 宇佐 洋二(被災地の隣市在住)

9月10日の朝、私は出張先の長野県のN市の駅前のビジネスホテルでテレビのニュースを見ていた。前日から自宅の茨城のほうの

雨が気になり、スマホのX-MP 雨情報を見ていると、連続的に鬼怒川・小貝川沿いに北に向かい降雨強度が高い赤色の表示が続いていた。

テレビでは、すでに10日午前0時20分に栃木県に大雨の特別警報を発令しており、茨城県にも午前7時45分に特別警報が発令され、慌てて

自宅と娘に電話をして避難の方法等を打ち合わせた。

私の家と、娘の家も鬼怒川と小貝川それと利根川に挟まれた位置に家があった。

は現地にテントを張り体制を整えていた。今思うと、そのとき既に堤防が切れていたのか？まだ、切れていなかったのか記憶は定かではないが、切れていなかったと思う。

緊急締切り工事に徹夜の出勤

翌日の昼頃、建設省から正式に出動の指示があり、15時頃には現地に行き、最も近くにあった取手作業所の職員と協力会社から編成するチームにより対応に当たることになった。K社は決壊地点より上流側100mに位置し、わたくし共は決壊地点より下流側2キロから堤防を利用して決壊箇所を塞ぐこととなったのである。

この小貝川右岸の決壊場所は、今回の鬼怒川左岸の決壊場所より北東に約4.5kmの位置(当時石下町、現在常総市)になる。

当時は現在と違い、主な通信手段は公衆電話だった。

幸い支店長車に携帯電話があることから、この車が前線基地からの情報発信場所となった。

よみがえる小貝川決壊(昭和61年)

私は、29年前の昭和61年8月4日から5日にかけて、千葉県・茨城県を温帯低気圧となった台風10号が通過、最大で1時間に400ミリを越す大雨を経験した。当時、勤務先(建設会社)はデミング賞に挑戦していて、ほとんどがその対応に追われていた。私の所属する北関東支も同様にリハーサルが終わり、営業部長と土木部の私は警戒警報が出ていた小貝川に向かい、夜の8時頃当時建設省の下館工事事務所が設置した現地対策本部に挨拶に行き、いつでも出動できる体制にありますと申し入れをした。そのときすでに、K建設



先ずは骨材（割栗石）の手配である。これも幸いに、支店管内（埼玉県花園）に大規模な協力会社がありいつでも出せる体制下にあった。

栃木県内にも砕石場はあったが、栃木県内も茂木町では一級河川逆川が溢水氾濫し、市街部の大半が 1.5m を越える濁流にのまれる状況下、対応ができなかった。

そうこうするうちに、建設省からはテトラポットを投入するから集めるように指示が来るが、支店・本社に対応を要請するも、自由に使えるテトラポットは皆無で、結局、運輸省管内の港（鹿島港）に設置されているテトラポットを使うことになった。

さて、決壊場所まで堤防の上を 2 km、重機の回送、資材の投入のためには途中車両の待避場確保が最優先と考え、20 時頃から割栗石入れ始める。さほど広くない堤防上をダンプを通し、真っ暗な中よくターンできたものだと思うが、必死（極限状態）になると普段ではできないことでも、やってしまうものだと後から思った。

徹夜のこの作業は、翌朝には締め切り箇所までの通路確保が目標だった。

いち早く社章入りテントを手配

さかのぼること 5 年前（昭和 56 年 8 月）、同じ小貝川の下流において、利根川本川からの逆流により堤防が破堤し、浸水面積 3,396ha、浸水家屋 5,847 戸の甚大な被害を受けた。近隣で仕事中の当社は、復旧のお手伝いをしていたが、ニュース映像には他社のヘルメットが映るばかりで、後日支店長は、社長に何をしていたと、現場

責任者は叱責を受けたのである。

そういった記憶が頭をよぎり、本社に社章の入ったテントを 1 張り、明日の朝までに決壊現場に届けてくれるよう手配をしておいた。

2 km の堤防の整備も夜が明けるころには終わり、クレーン、ブルドーザー、指揮所としてのテントも決壊部に設置、手配してあった割栗石も道路に数珠つなぎに並んでいる。

協力会社の末端まで、一丸となって取り組んでいることが実感として湧いてきた。

夜明けとともに、ブルドーザーがまだ小貝川からの流入が止まらない中を押し進めた。上空にはヘリコプターが舞い、TV ニュースではブルドーザーが割栗を押し進めている映像が流れていた。

徹夜明けの後には交代要員と代わり、守谷の自宅に帰りぐっすり寝て（家族は妻の実家に帰省中）、翌日には、また、デミング賞への挑戦が続いた暑い夏であった。



国土交通省資料

建設省から要請があり、翌日には締め切り始めたことには、ラッキーなことが沢山あった。結局、先行していたK社には割栗石の調達ができず、8割方締め切る頃に、こちらにも資材を回してくれるように依頼があり、何とか両側から締め切ったような格好になったのである。

それから

観測史上最悪の被害を受けた小貝川は、昭和61年9月、建設省（現国土交通省）の直轄河川激甚災害対策特別緊急事業の採択を受け、小貝川中流部約10kmの堤防補強、小貝川大橋の架け替え工事、そして母子島遊水地の建設が行われ、総事業費208億円、工期が5ヶ年という大規模かつ緊急の事業が実施された。

洪水で冠水した母子島、飯田、一丁田、椿宮、小釜の5集落には新たに盛土した造成地に移転、その跡地を含む約160haを堤防で囲み、遊水地を建設。母子島遊水地は通常は農地として利用できるが、小貝川が増水したときは、その水を遊水地に



導き入れて溜め込み、洪水の危険が去った時点で小貝川に戻すことで、下流部への水量を減らし、小貝川全体の安全性を高める。母子島遊水地には、洪水時に約500万m³の水を溜めることができるようである。

今回の豪雨では、堤防の決壊にまでは至っていない1つの理由には、史上最悪の被害から、大規模な対策が実施されたことだと思われる。

今回の災害

今回の鬼怒川の決壊では、行方不明者（9月12日現在15名）もおり、被害の全容はいまだはっきりしないが、ハード（堤防の強化・遊水池等）・ソフト（災害の予測・避難の指示等）からの検証及び対策が、早急になされるべきと思われる。



鬼怒川決壊箇所

国交省によると、現場付近の鬼怒川は河川法に基づく計画で、「10年に1度の大雨に耐えるため」（同省）、堤防のかさ上げや拡幅工事をする予定だった。だが、工事は20キロ下流の利根川との合流地点から上流に向かって順番に進めているため、現場付近では昨年度から用地買収を始めたばかりだった。

改修が必要な堤防のうち整備が終わったのは44%にとどまっているという（記事及び写真は朝日新聞記事より転載）

今回被害に遭われ亡くなられた方に心よりご冥福申し上げますとともに、被災された方、家族や友人を失った皆様、心からお見舞い申し上げます。

災害は忘れたころにやってくるがない対策を！

この記事を書いている9月12日午前も、消防車のサイレンが鳴り響いている。各県の消防関係車両が、常総市をめざしている。

□ 事業報告 □

建設産業初 NPO をプラットフォームに新規事業の創設をめざして

「共創プラットフォーム事業化研究会」フェーズⅠ報告

建設産業では初の、NPO をプラットフォームとした新規事業の創設をめざす目的で、2014年10月立ちあげられた「共創プラットフォーム事業化研究会」が、このほどフェーズⅠの研究期間を終了し、報告書をまとめた。

わがCSNは、CNCP 会員として本研究会を提案するとともに、担当責任者として研究会の運営にあってきた。以下、フェーズⅠの活動概略を報告する。

本会は、ゼネコンや建設コンサルタントの未活用技術や特許などを調査し、技術や人材をNPOならではの立場から戦略的に事業として生かす方策を研究する。従来の産官学体制では発足が難しい研究会であり、NPO だからこそ実現したもの

である。

研究会には安藤・間、奥村組、熊谷組、西松建設の4社が参加した。

研究指導は中央大学ビジネススクール露木恵美子教授にお願いした。

本研究会でまず越えなければならないハードルは、同じ業界で競合関係にある複数の企業がそれぞれの企業の枠組みを超越した「場」を生成し、その「場」においてコンテンツを共有化し「知」を複合的に結合することであった。

この「場の共創」理論の第一人者が露木先生であった。露木先生に研究指導を快くお引き受けいただき現在に至っている。

研究内容は以下の4項目である。

- ①技術事業化プロセス・手法を理解するための研究会の開催
- ②参加各社での具体的な未利用技術の調査・検討
- ③フィジビリティスタディ（事業に向けた各調査結果の取りまとめ）
- ④事業化計画書の策定（新規事業の企画・提案）

研究期間は、フェーズⅠ（2014年10月～2015年7月）、フェーズⅡ（2015年8月～2016年7月）の2か年とした。

月に1回、2時間程度の研究会を開催し、技術、情報、研究成果を共有。参加企業は積極的な新規事業の創出を展開している。研究会では複数の企業を交えることによる相乗効果が生まれ活発な研究活動となっている。

フェーズⅠでは、①「場の共創」理論の学習、②参加企業の現状と課題を掘り下げるSWOT分析、③社会の変化と顧客ニーズ④ビジネスプランニング⑤参加企業の新規事業における課題、⑥参加企業の埋蔵知財調査と分析、⑥事業化シミュ

レーションを、課題として取りあげて進めてきた。

フェーズⅠは、ほぼ実施計画書の内容に沿って実施された。

露木先生(正面白ブラウス姿)とメンバー



自治体インフラメンテナンスでのNPOの貢献のあり方を探る

「自治体インフラメンテ事業化研究会」報告 和久 昭正（会員）

当NPOが加盟するNPO連携プラットフォーム（CNCP）では2014年に、社会的課題であり地域ごとに対応する必要がある自治体インフラメンテナンスを対象課題として、NPOの貢献のあり方を探るための調査研究会準備会を、土木学会シビルNPO推進小委員会と共同で立ち上げ、調査研究活動を行ってきた。

その結果、各主体の貢献のあり方については、まだ今後の検討課題であるがNPOの貢献の場はあること、技術者や一般市民を巻き込んだ活動が始まっており、それに対する貢献が期待されていることがわかった。

そこで、CNCPの地域活動推進部門では、第一に部門活動をより本格的に進めるために、会員よ

り地域活動推進部門の活動に参画するメンバーを2015年6月に公募し、部門活動の中心的な活動として「自治体インフラメンテ事業化研究会」を発足させた。メンバーは次表に示す9名と、メールメンバー5名である。

第1回研究会（7月8日）では、準備会での活動報告と、岡野委員から「公共施設等総合管理計画の策定に当たっての指針（H27年4月総務省通達）」の説明がなされた（7ページ参照）。

第2回研究会（8月5日）では、鈴木委員からISO55001の概要と道路メンテナンス事業への活用と展望、および和久委員からY市と実施した「橋の長寿命化促進事業」の取組みについての事例紹介がなされた。

第3回研究会（10月13日）では、中村委員から日本ファシリティマネジメントセンターにおけるインフラ産業育成懇話会からの話題、および皆川委員長から船橋市に対するヒアリング結果についての報告がなされた。

今後の取り組みとしては、次のように2ワーキンググループ（WG）を設け、テーマを分担して活動していくこととした。

WG1：船橋市を対象として継続的な協働活動を提案し、実施する（岡野・廣田・皆川委員）。

WG2：PFI/PPPに関する情報を収集整理し、内部の情報共有や外部への啓発活動に利用することを検討する（有岡・鈴木・和久・多和田（中村委員の代理）委員）。

研究会メンバー

氏名	所属	備考
有岡正樹	スリム Japan	CNCP 常務理事
岡野眞久	大日本土木(株)	土木学会シビルNPO推進小委員会, 国交省OB (河川)
鈴木 泉	スリム Japan	(株)ガイアート TK (飛島・熊谷)
多和田俊介	(株)ISS	土木学会シビルNPO推進小委員会
中島満香	プライスウォーターハウスクーパース(株)	
中村裕司	(株)ISS	代表取締役
廣田 治	シビルまちづくりステーション	
皆川 勝	東京都市大学	CNCP 常務理事, 土木学会シビルNPO推進小委員会副委員長
和久昭正	シビルサポートネットワーク	(株)高島テクノロジーセンター

□ 活動報告 □



おいしいもの食べて暑気払い

これであなたもうなぎ博士

日時 2015年8月31日 18時～20時
 会場 神田駅前「サニー会議室」
 講演 「うなぎ談義」
 講師 株式会社鯉平社長 清水良朗氏

前半猛暑、後半涼しかった今夏、その締めくくりの8月末、活鰻問屋直営店の鰻重を味わう番外サロンが開催された。

2011年に、埼玉県南卸売団地協同組合の参加企業を対象に、BCP策定支援講座を開催した。そのうちの一社、活鰻問屋(株)鯉平の清水社長は大宮南口ターリークラブの会員であり、そのご縁でさる7月

同クラブの例会に、BCPの講演をするようお招きいただいた。清水社長は、ご商売柄環境問題にも造詣が深く、席上CSNサロンでの講演をお願いしたところ、うなぎを食べながらお話ししましょうか、と快諾された。BCPを忘れずにいてくださっただけでもありがたいのに、なんと鰻重つきの講演が実現したのである。

次回サロンまで待てそうもないので、直営の池袋店から届けやすい神田に急ぎよ会場を借りて、番外サロン開催となった。

(株)鯉平は、大宮で創業118年のうなぎなど川魚専門の卸し問屋である。

うなぎ好きとしては、日本種うなぎが絶滅の恐れある生物と報道されて以来、うなぎ業界はかなり厳しくなるのではないかと危惧していた。

しかし、清水社長によれば、国が完全人工養殖の研究開発や河川環境の改善、業界も天然ウナギやシラス捕獲の自主規制に取り組むなど、資源保護の気運が高まっているので、専門店にとっては長期的大局的に大変良いことと捉えることができるとのことだ。

池袋の直営店〔まんまる〕の職人さんが入念に焼き上げたうなぎを、オーナー自ら静かに蘊蓄を傾けてくださる…ぜいたくなひとときであった。





安全管理とリスクアセスメントについて

機械は故障する、人間は間違える！立っている物は、倒れる！吊っている物は、落下する！高いところにある物は、落ちる！丸い物は、転がる！動いている物には、挟まれる！回転している物には、巻き込まれる！

日時 2015年10月12日 15時～17時
 会場 オリピック記念青少年総合研修センター
 講演 「安全管理と
 リスクアセスメントについて」
 講師 労働安全コンサルタント
 奥田 眞司氏(シニアアドバイザー)

20回目をむかえたCSNサロンは、シニア・アドバイザーであり労働安全コンサルタントの奥田さんに講演をお願いした。

CSN会員の大部分は、建設会社やコンサルタントで勤務してきたので、今回の演題は何にもままして関心があると思う。

OBといえども、最新の労働災害の動向はおお

いに気になるところである。

本年度上半期は、死亡・死傷災害は減少傾向だが、墜落転落災害がいまだに多くを占めているとのことだ。

さらに、疾病では熱中症が多く、精神障害の労災支給決定件数が過去最高となったとの報告があった。

これこそ、我われの現役時代には見られなかった近年特有の状況かな、と思った。メンタルヘルスについては、企業にストレスチェックを義務化する法改正があり、12月1日から施行されるという。メンタルヘルス対策は、以前からその必要性が課題となっていたが、こうして総合的な取り組みが進みつつあることを知った。

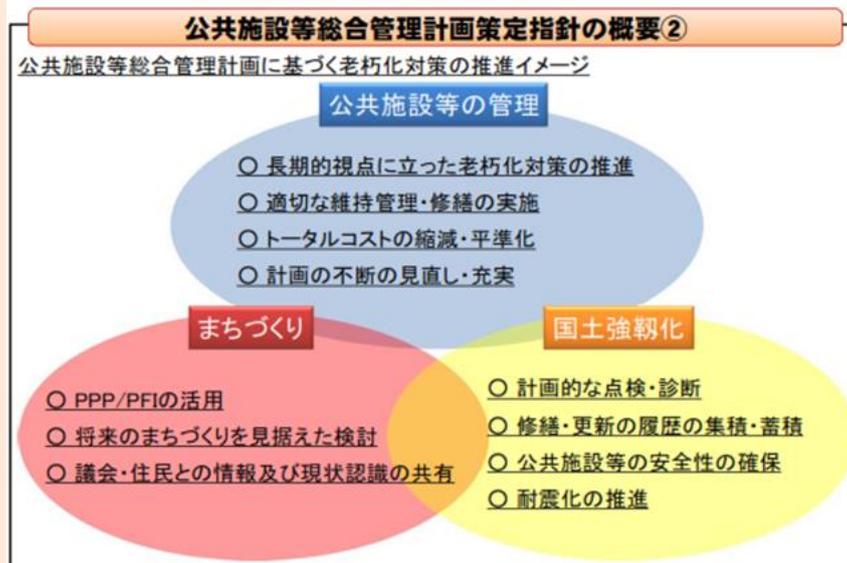
「実際に体験してみれば!」という観点から、『あなたの「省略好き度」チェック』など、講師が持参されたいくつかのよく考えられたグッズをみんなで試みた。

どれも、先刻承知の基本事項ばかりのはずであったが、忘れたり手が動かなかったり、あらためて反復訓練の必要性を痛感した次第である。以上



奥田講師

5ページより
 続く



サロン 20 回の歩みをふり返って

事務局長 高橋 肇

CSNサロンは、さる 10 月 12 日の奥田シニア・アドバイザーによる講演で、第 20 回を迎えた。

平成 18 年 12 月 18 日の第 1 回から 9 年、年 2 回の開催を続けてきたことになる。

サロンの開催意義

年に何回か会員が気楽に顔を合わせられる交流の場として、サロンは始められた。

専用の事務所がない我々としては、メンバー相互の親睦を深める場は、このサロンでしかないの、その役割は大きいといえる。

サロンといえば、ノーベル賞受賞者がその発明・発見のきっかけを、研究所のサロンで同僚と

のなにげない会話から得た、とその効用を評価するエピソードがよく伝えられる。一方、結果の見えない会合を「サロン化している」と批判的に使われることもある。

わがCSNサロンは、目的が「気楽に顔を合わせられる交流の場」であるから、おおいに“サロン化”してよろしい、と考えている。

講師と開催テーマ

サロンであるから、メンバー間の談笑の時間をおおくとるべきかもしれないが、それでは間が持てないだろうということで、第 1 回目から話題提供をしていただくゲストスピーカー（講師）をお招きしている。

あらためて講師と開催テーマの一覧表をながめてみよう。

テーマは、じつに様ざまである。サロンの企画時点で、CSNの取組み（環境・防災・社会資本の維持更新）に関連したものを選びべきかいつも迷うが、結果はご覧のように関係あるようなないような話題となっている。

講師は、これは一見してわかるが、すべてCSNメンバーまたはその知人・友人である。

それぞれの方が、その道の第一人者や先達として活躍されている。テーマの多様性とあいまって、CSNの

CSNサロン：講師と開催テーマ一覧

回数	開催日			開催テーマ	講師
	年(平成)	月	日		
1	18	12	18	「バイオマスタウンアドバイザーの役割り」	宇佐洋二
2	19	6	18	事業継続計画（BCP）の取組み	辻田満
3		12	3	今、求められているNBCRテロ対策	井上忠雄
4	20	6	9	コミュニティビジネスの紹介	辻田満
5		12	1	浮体式橋梁の提案	横川義昭
6	21	6	8	国境なき技師団の活動	杉山昇
7		12	7	地下鉄の父・早川徳次の事業展開とその評価	松尾全土
8	22	6	7	プレゼンテーション・スキル	君島光夫
9		12	6	日本酒の文化	岬麻紀
10	23	6	6	酵母の話	高瀬斉
11		12	5	日本酒の文化 第2弾	宮川都吉
12	24	6	1	ブータン王国談義	高瀬斉
13		12	3	これからの地方自治	白井一
14	25	7	8	伸び行く航空業界と空港を巡る諸問題	成瀬宣孝
15		10	14	地方自治体における危機管理	星弘行
16	26	1	13	「土壌学」の話	太田清彦
17		7	14	海で天然の魚をつくる	牛久保明邦
18	27	1	12	食糧生産に貢献する陸上養殖の未来・屋内型エビ生産システム	鈴木達雄
19		7	13	歴史を学ぶとビジネスの発想が変わる	野原節雄
20		10	12	安全管理とリスクアセスメントについて	平井光之

人材ネットワークの広がりや深さが読み取れると思う。

20回のなかで2回来ていただいた方が、9・11回の高瀬齊氏である。その講演「日本酒の文化」が好評で、再リクエストとなった。なお、あいだにはさまる第10回は宮川都吉氏「酵母のはなし」で、氏も日本酒に造詣が深く、サロン3回連続のお酒の話題であった。

女性講師は、第8回の岬麻紀さんひとりである。土木系NPOが女性になじみにくいというわけでもないだろうが、なぜか機会がなかった。

なお、シニア・アドバイザーの西島葉子さんに次回講演をお願いしているので、ご期待を。

事務局苦労話

苦労というほどのものはないが、しいていえば講師への謝礼が車代しか出せないことである。ただ、いままでみなさんにご理解いただいたので、これからもこれが障害になることはないと考えている。

問が残るところだ。

それを補うのが、17時からの懇親会である。

サロンは、いつも参宮橋のオリンピック記念青少年総合センターの会議室で催される。

本センターは広大な施設で、構内にレストランが数か所あり、懇親会は「レストランとき」で開かれる。ここは、200席もある食堂であるが、常連となった我われのためにいつも奥まっで落ち着いたところに席を設けてくれる。



懇親会(レストラン「とき」)

講師選びについて、20回つづいてよくタネが尽きないね、といわれる。

たしかに、前述のように講師陣は知人・友人なので、そのうち出尽くすときがくるだろう。

また、わたし自身の人脈も、現役引退とともに枯れていくと思っていた。

ところが、リタイアしてみると状況は一変した。

NPOや地域活動を通じて日々新しい出会いがあり、それもビジネスマン時代では得られなかった世界へと広がっていくのである。

70歳をすぎたいまでも、わたしの手元の候補者名簿は増えつづけている。生意気ないいかたになって恐縮だが、じつは、講師選びにちっとも困っていないのだ。

サロンの重要な補完機能—懇親会

サロンは、毎回15～17時の2時間である。講演のあと、10分程度の質疑応答があって終わる。これでは、“気軽な交流の場”といえるか疑

大きな窓に代々木公園の緑がひろがり、じつに居心地がよい。酒肴もリーズナブルだ。

ここで、お酒を囲んでおおいに議論が盛りあがるのである。講演と懇親会が一体となったこの約4時間こそ、本当のサロンではないかと思う。

であるから、どうかみなさま、講演だけでお帰りにならず、懇親会まで参加されるようお願いする次第である。

サロンの今後

とくに気張ることもなくここまで来たので、今後もそんなに肩に力を入れなくていいと思っている。ただ、会員の交流という観点からすれば、もっとメンバー自身に講演をお願いしたらいいのかもしれない。

事務局として、メンバーに楽しんでいただけるサロンとなるよう精いっぱい工夫をこらしつつ、これからの10年は世代交代を念頭においた運営も必要と考えている。

□ トピックス □

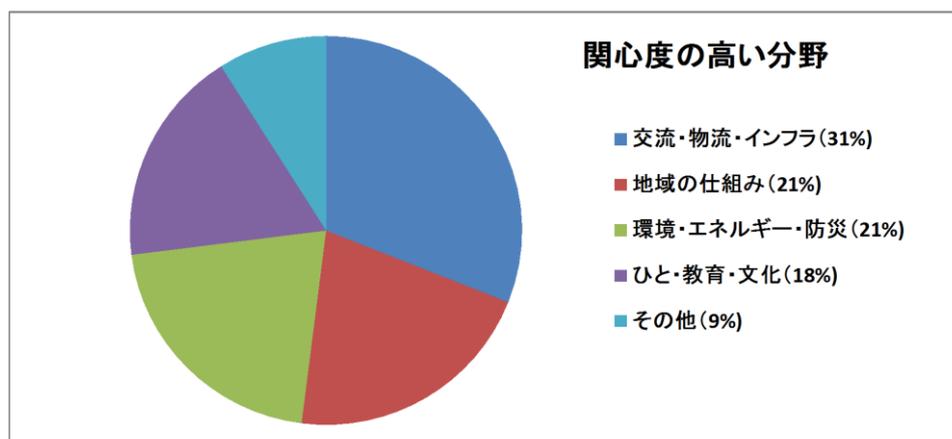
関心高い「地方創生」事業

CNCP が行った地方創生事業への取り組みアンケート結果

当 NPO が加盟して活動をしている CNCP が実施した「地方創生事業への取り組みアンケート」の結果が公開された。その概要を報告する。

このアンケートは、辻田代表が担当している事業化推進部門が実施したものである。

1. アンケート対象者、法人正会員 22 法人の内 11 法人 (50%)、個人正会員 21 名の内 8 名 (38%) から回答が寄せられた。CNCP において実働組織となる法人正会員の半数は「地方創生」に対して高い関心を持っていると言える。
2. 関心度の高い分野は下図の 4 つが挙げられる。中でも、交流・物流・インフラ分野が 33% と高い。
3. 具体的な事業として全体の 25% 以上の選択率があったテーマとしては①インフラの維持・廃棄・強化（リノベーション）が全体の 48% と高く、続いて②インフラ（社会基盤）の資産管理が 33%、③コンパクトシティへのまちづくりが 30%、④自然再生エネルギーの地産地消が 27% となっている。
4. 事業への関わり方は事業分野ではらつきはあるものの、全ての分野で「企画」が 62%～93% 以上と高いが「実施」33%～77%、「運営」20%～31% と参加意欲が見られた。
5. 選択された事業分野の事業実績については 76% が事業実績ありと回答した。また、それに関わる技術・資格についても 73% が保有している。具体的な取り組みの候補地を 64% が記述していた。
6. 以上の結果を総括すると CNCP としては「地方創生」に関してかなり広範囲の分野への取り組みは可能な組織であると共に実績・技術・資格は十分に保有していることが明らかとなった。また、候補地としても何らかのかかわりのある候補地が挙げられている。



シニア・アドバイザーの呼称変更のお知らせとお願い

CSN では、これからも継続的に次世代に活動をつなげていきたいと願っています。

そこで、発足以来使用してきた「シニア・アドバイザー」の呼称を、「シビルサポーター」に変更することとしました。

そもそも「シニア」の呼称の意味には「ベテラン」、「経験豊富」の意味が込められておりましたが、どうも現役の方には「リタイアした方」、「退職者」のイメージが強すぎて応募する気持ちにはなれないようです。

新しく使用する「シビル」は、当 NPO の名称「シビルサポートネットワーク」にも使われている言葉であり、「土木」の意味にくわえて「市民」の意味としても幅広く用いられている言葉でもあります。

今後、名称の変更を機に活動の仲間を増やしたいと願っています。

シビルサポーターの募集要項は下記の通りです。ぜひともまわりのお知り合いにお声をかけください。

シビルサポーターとして登録・活動しませんか？

■シビルサポーター募集

本 NPO 法人では、市民や行政との協働事業および技術的な支援事業に取り組む人材を募集しています。あなたの経験と専門分野を登録していただき、当 NPO の活動に参加することができます。活動はとくに自主性が尊重され、あなたの経験や専門性を活かした社会貢献がはかれます。また、事業構想や企画等を提案し、当 NPO をステージにして活動することも可能です。

■シビルサポーターの活動

定期的（3 ヶ月に 1 回程度、主として平日の昼間）にミーティングや CSN サロンを開催し、参加者の情報交換や提案の場とします。また、当 NPO の事業や受託業務に参加することもできます。有償の受託業務に参加された場合は所定の業務手当てをお支払いします。

■シビルサポーターの特典

- ・CSN サロンへの参加（3 回程度／年間：参加費用は無料、一般参加有料）
- ・セミナー、講座等への受講（優先的に参加できる：会費は正会員と同額）
- ・CSN の季刊誌を E-mail にて配布（4 回／年間：無料）
- ・有償受託業務への参加（所定の業務手当てをお支払いします。）

■シビルサポーターの登録

シビルサポーターは登録制です。

登録費用として年会費 3,000 円を必要とします。

入会金の負担はありません。

登録申込は CSN ホームページ (<http://www.npocsn.org/>) からどうぞ！

中央大学創立 130 周年記念論文コンテスト 辻田代表論文、「努力賞」受賞！

8

辻田代表の「NPO は中央大学を未来につなぐパートナー」が、応募 99 点のなかから努力賞を受賞したことが、10 月 25 日発表された。おめでとうございます。

CSN のうごき

行事・イベント	実施日	参加者
事務局定例会議	8/3、9/7、10/5	辻田、宇佐、高橋
シビル NPO 連携プラットフォーム運営会議	8/5、9/8、10/13	辻田
シビル NPO 連携プラットフォーム理事会	8/25	辻田
共創プラットフォーム事業化研究会 フェーズⅡ 検討会	9/10	辻田、宇佐、高橋
共創プラットフォーム事業化研究会 (フェーズⅡ) 第 1 回研究会	10/14	辻田、宇佐、高橋
第 20 回 CSN サロン	10/12	10 名
CSN 役員懇談会	10/12	辻田、高橋、鈴木、小川、和久
CNCP 総会	10/31	辻田
活動報告季刊誌第 11 号発行	10/31	



編集後記

- ・宇佐副代表の巻頭言に、30 年前、小貝川決壊現場に駆けつけた支店長車の自動車電話のことが、記されている。
- ・その自動車電話が、復旧作業の指揮になくはならないものだったことがうかがわれる。
- ・たった 1 台でも、被災地で大きな力となっている。
ひるがえって、今回の鬼怒川決壊では、普及した携帯電話が生死をわける場面でさぞ活躍したことだろう。
- ・そんな事例が、もっと報道されてもいいと思った。

(事務局：高橋 肇)